

高橋啓窓

嫁が君猫人形に一目散
飛び跳ねる孫の手を引き初詣
母が摘む春七草の良き香り
黒百合に託して告げる蝦夷の恋
溪流やヤマベ飛び跳ね秋涼し
山間の湯の香ほのぼの夕紅葉
釧路川下りしカヌー秋夕焼け
母が焼く秋刀魚待つ子らにぎやかに
ひぐま待つ知床上る鮭の群
知床や蝦夷海霧切れて雄姿みせ

.....

お陰をもちまして、私は一昨年の三月末に日本電工を退任し、昭和三十八年富士製鉄入社以来四十四年間の会社生活を無事終えることが出来ました。

テニス、ゴルフ、デジカメ教室、旅行と自由な時間を楽しんでおりました所、家内が「啓悟さん、足腰を鍛えることも大事ですが、俳句などで頭の体操をされてはどうでしょうか」ということで、その年の七月に「東北大学鬼城句会」に参加させて頂きました。俳句は私にとりまして、ほとんど初めての出会いです。最近読んだ俳句に関する本の中に「俳句は自分の見た風景や、感じたこと、体験したこと、発見したことなどを言葉に表す詩の一種でもある」と解説されていました。鬼城句会のお陰で、旅行することが、今までよりもっと楽しくなりました。

この四月に家族と一諸に京都旅行に出かけました。桜が春爛漫と咲き誇っていました。仁和寺の桜を見て一句が浮かびました。

せせらぎに御室桜の花ふぶき

まだまだ、つたない俳句ですが、鬼城句会の皆様とご一諸に和気あいあい俳句を楽しんでまいりたいと考えています。